

高坂正顯著『カント』

谷山隆夫

カントは、凡ゆる現代哲學がそこから湧出する泉であり、またそこへ朝宗する大海である。凡そ原理的に思索し、根源的に窮理せんと欲する現代人は誰しもそこから出發し、また一度はそこへ歸らねばならないであらう。まことにカントは現代哲學の故郷である。このことは今更こと新しく述べたてには餘りも常識的である。それにも拘はらずいま敢へてそれを再言するのは、それが常識的なるが故にこそ、却つて實行されてゐないのではないかと疑はれるからである。實際、一般の教養人はいふまでもなく、哲學專攻の若い學徒のなかでも、カントとの眞摯な取組を體驗した人は果してどれだけの數に上るだらうか。カントに傾倒するゆとりをさへ與へないかに見える世のあはただしさに、何か知ら嘆きの情を禁じ得ないのは恐らく筆者一人ではあるまい。ところで諷つて考へる

と、その相對的な理由の幾分はカント自らの側にも存するのではあるまいか。といふのは、彼の哲學はその廣袤において到底これを一望のうちに收むべくもないし、またその思索の進め方に於て到底これと步調を合し得ないほど *grundlos* であるから。ひいては、それはあたかも無限の曠野を一步一步踏みしめつつ前進するかの如き印象をさへ與へ、通常の天稟を以つてしては中途で疲勞困憊し、動もすれば最初の壯圖を轉じて、ささやかではあるが手近かな花園を漫歩する安易さに誘はれるから。それは強ちひとの意志の弱さにのみ歸することのできないものをさへ含むかに見える。「光輝ある無味乾燥」といふ語はまことにカント哲學を評し得て妙である。ここに於てこの無限の砂漠——實は沃野——を横切るための *Volitional* が必要となつてくる。さうして事實、その *Volitional*

の何と多いことよ。舊い形容語を借れば「汗牛充棟」のおもむきがある。併しそれらのうち誤りなく目的地に導いてくれ、またカントの堅實な歩調をそのまま傳へてくれるものの何とまた少いことよ。

いつたいカント解釋の變遷を彼の體系に聯關させてあげてみると、その重心はほぼ彼の著作の順序に従つて次第に移動してきたといへよう。すなはち「第一批判」、「第二批判」、「第三批判」といふ如くに。更に、三つの批判書から蟬脱した——したがつて單なる「批判」の立場のみからは理解できないと見られる——後期の著作、例へば「宗教論」や「道徳形而上學」に「體系」の頂點を見出し、ここに解釋の重心を置かんとするのが最近の傾向であらう。このやうな重心の移動はまた「純粹理性批判」を中心とする「批判」精神だけの解釋にもあてはまる。ショーペンハウエルの「感性論」中心の解釋から始まつて、新カント派の「分析論」中心の解釋を経て、最近の「辨證論」に優位を置く解釋に至るまで（こ

の點は天野博士邦譯「純粹理性批判」の「譯者後語」に詳しい、「體系」の場合と大體同様なコースを辿つてゐる。如上の傾向は時代の要求に應ずるカント解釋の必然的發展と解されるが、それだけに初學者にとつては前述の如き困難性が倍加されたといへるであらう。同時にこれに伴つて、良き *Verhät* への渴望もまた高まつたわけである。然しながらこの渴望にも拘らず、良き *Verhät* を提供することは事實において至難である。單に批判精神を闡明するだけでも決して容易ではない。まして難多な解釋を抽んで自己の存在理由を明確にし、「批判」と「體系」とを統一的光源から照明することによつて全カント哲學に獨創的解釋を與へる如きに至つては寔に難事の中の難事である。

いま高坂正顯氏の近業『カント』（西哲叢書中）によつてかかる渴望が醫やされたことは我が哲學界にとつて大なる欣びでなければならぬ。個人的に筆者自身についていつても、この先輩の容易ならぬ力量と努力との結晶

によつて裨益されるところ實に多大であつたことを感謝せざるを得ない。

いつたい「批判」においては超越的と內在的とが區別されるのが常であるが、これはまた當然「解釋」についてもあてはまる。さうしてカント解釋の近時の雙壁たるハイデッガー、コーヘンの解釋をこれに配することもできよう。ところが高坂氏の勞作はこれらの何れにも偏せず、むしろ二者の綜合を企圖されてゐるかに見える。例へば「カントの超越的論理學を時間の論理と見る點に於て、私は時間を忘れたコーヘンの純粹論理の立場でも、論理を忘れたハイデッガーの時間の立場でもない」(一〇六頁)と説かれてゐる。實際、兩者のカント解釋は何れも透徹的で獨創的であることは認めながらも、その一方は餘りに超越的であり、他方は餘りに內在的である點に慚らぬ感を抱く人々も尠くはないであらう。それらに比すると氏の立場はいはば超越即內在の立場をとつて居られ、この點に讀者を全面的に首肯さすものがある。

次に、『カント』を組立ててゐる主要な骨格を見ると、人間學・純粹理性批判・實踐理性批判・判斷力批判にそれぞれ、日常性の立場・悟性の立場・理性の立場・判斷力の立場を配當され、貫くに「哲學的人間學」の理念を以つてされて居る。この創意に満ちた試みは——寡聞な筆者は我が哲學界に於ては固より、カントを生んだ當の獨逸哲學界においてもこれと類型的な試みあるを知らない——從來の如く解釋の重心を單に時間發生論的に著作順に移動さすのではなくして、カント哲學そのものの論理的發展の内面的・必然的秩序を追ふものであつて、それが美事な成果を收めてゐる。ここでは「體系」の見地と「批判」の見地とが何等の乖離をも示さず、全き統一性に持來されてゐる。のみならず、三つの批判は「超越的人間學」といふ統一の根據から有機的に連繫せしめられてゐる。これを、在來の解釋が三批判を單なる並存のままに放置したり、或は一の批判の中心概念をただ平面的に擴大して他の二批判にまで推し及ぼさんとしたりするのに對比すれば、本書のもつ獨自性が瞭然となるであ

らう。思ふにこの成功の主なる理由は、カントの著述の事實的順序を重視して「批判」精神の闡明から出發されることなく、却つて後期の著作たる「實用的人間學」を日常性に配されることによつて茲に出發點を求められた、といふ全く獨創的な計畫を敢行された點に横たはるであらう。すなはち「批判」からではなしに「體系」から出發して兩者の相即を企圖された點——問題提出の正鵠さ——にかかる成功の理由が存するかと思はれる。通常の解釋の如く「批判」の究明から出發する限り、それと「體系」との不統一は避け難いであらうし、ひいてはフイヒテヤヘーゲルのやうにカント哲學を遇するに「無體系」といふ非難を以つてせねばならなくなるであらう。

更に、「すべてを粉碎するカント」といふ舊いカント觀を匡正して、批判を形而上學の定礎と見んとする解釋は、從來から必ずしもその例に乏しくはない。ハイデッガーの如きはその代表者である。併しその多くは餘りに論理性を輕視しすぎて、ただの超越的解釋に終る憾みがある。然るに氏の『カント』はあくまで歴史的カントに

忠實である。これが、第一の特徴と聯關する本書の第三の特徴である。ここでは論理性が十分自覺的に尊重されて居り、この點に於て、根本的意圖が異なるにも拘はらず、マールブルヒ派との接近を思はずものがある。何れにしても著者の原文引用は極めて精確・適正であり、手法はどこまでも堅實である。従つてこの著は、自らカントの原文に接したことの無い讀者にも、カント的な思索の歩調を味はしてくる。しかもカント的「無味乾燥」に代る平明な敘述と該博な引用とは、大なる困難を覺えしめず讀者を目的地へ導いてくれる。同時にそれは諸地のカント解釋に對する公正で犀利な批評を含んでゐる。これによつて讀者は、カント哲學がその外觀に反して、何等荒涼たる砂漠ではない所以を知ると共に、諸解釋の踏破した足跡をも教へられる。かくして本書は「超越的人間學」の視點からカントの全體系への通路を啓開してくれるが、その行論はあくまでカントに即しつつ周匝であり、精緻であつて、決して前述の如き「超越的」解釋に陥つてゐない（例へば「圖式論」に於て想像力を判斷力

の媒體と解する如く)。したがつて創意を孕みながらも所謂「奇警、人を驚かす」ところがなく、無比の堅實味をおびてゐる。

以上思ひつくままに本書の特色の二三を摘記してみたが、要するにこの書は、少くとも邦語で書かれたカント研究書のうち最高水準に屬するもの一つであるといつて憚らない。ただ敘述形式に關してもし望蜀の語が許されるならば、宗教論・法律哲學・國家觀等がひとまとめになつてゐない點、またそれらのために割いたスペースが聊か少なすぎるかと思はれる點に僅少の疑問がある。尤もこれとても、著者が三批判相互の內面的聯關の樹立・確保に關心の中心を置き、宗教論等をこれに關係させて解説されてゐるからであつて、内容的にはむしろこの方が當然であらう。従つてそれらを獨立に取扱ふべきか否かは、ただ諸者の便、不便だけの問題にすぎない。またそれらの敘述に割いたスペースの少いこと、氏自ら認めて居られる如きカントと前後の思想家との關係やカントの

現代的意義に觸れなかつたこと、等は叢書の持つやむを得ざる制限に由るものであつて、いささかも本書の瑕瑾とはならない。筆者はかかる良き *Verdienst* を得た我が哲學界に、*„Also muss auf Kant zurückgegangen werden.“* の聲が幾分でも高まることをひそかに待望し、併せて著者に心からなる敬意を表はす次第である。(弘文堂發行西哲叢書 四六版四三〇頁 定價貳圓)